

伝えたい、伝統芸能の心

高森町伝統芸能連絡協議会会長 本田 研一

清栄の山々が、顔面を覆うように迫り来る。

この坂道を登りつめると、やがて南方に高千穂の峰々が見えてくる。

巨大な二本の杉が、この坂道よりすぐの所にある。

背景に杉木立があり、それらがとり囲むかのように見えても、和傘を広げた格好の杉枝が、その命の存在を誇示している。

まさにそれは、「高森殿の杉」。

幾世に渡り、窪んだ谷間如きに有り、その流れをせき止め、ゆるやかに時が刻んだ広場だと知る事ができる。

数百年を生き、そして見続ける素晴らしき世界。

この道は今でこそ舗装された道路に変わっているが、その行程にはほとんど変化はなく、道路改修前はただただ大きな石が多かったと、近く

の五十代の人が言っていました。

子供の頃、年に最低二回は歩いて高森の町へやって来ました。それはまだ寒く時には雪の三月の初市と、八月の風鎮祭でした。

仲間と連れ立って何十円を持ち、この峠を超え最初に辿り着いたのが、今は空き家になっっている商店。そこでは粉ジュースを買い、歩くと、今までは違った感覚といえる、祭囃子が聞こえてきました。

市に入ると、まずは「ゲーゲ」と音をたてるもの、パタパタと鳴る沢山の玩具が出迎えてくれます。どれもこれもおもしろく、手をやりさわっては次の店へ行く、その度に店主から怒られる、を繰り返していました。

雑踏の中、年かっこうも同じ位の、眩しく映る山引き出演者の少女に出くわします。凜として憧れをいだき、今思えば「格好をつける」そんな感

じでも、それは淡く胸を打つ一年に一度の出会いでした。

やがて夕暮れになり、なごり惜しくも帰らなくてはならず、暗くならないうちに帰ります。

夕日に照らされながら、まだまだ祭囃子が聞こえてくる高森の町を背景にして登りつめた峠も、行くと帰りとは風景が変わり、蘇陽から高千穂の峰が見えて来ます。そこからは下りにかかり、やがて夕闇に包まれ、円満寺に至る頃には、すっかり暗くなります。



▲清栄山円満寺（矢津田・高尾野）

円満寺は十六世紀に建立され、清栄山を仰ぎ見る位置にあります。

戦後に道路改修も始まり、草部北部の道路も直通になり、この円満寺の前を通ることは少なくなりましたが、それまでは草部の南北を結ぶ要でした。

この寺の信徒は、地元から旧蘇陽町にまで至り、その縁の広がりや婚姻などに見ることが出来ます。その彫刻の素朴な素晴らしさに、信仰の厚さを感じます。

やがてお寺を出て左手に曲がると、壇上に銀杏の古木が見えて来ます。当時の子ども達にとっては、最大の遊び場所であつただろうと思われ、楽しみは、何かの祭りで配られた、袋入りのお菓子でした。

円満寺を通り過ぎ、旧草部北部小学校まで三十分位かかると、この地区の中心地にあたる赤羽根に着きます。そこには交差した道路脇に広場があり、石段を登りつめた所に、矢津田神社があります。秋になると願の相撲が開催され、子供から大人までそして地区対抗と、とても賑わっていましたし、広場には門前市がたっていました。